

裏側からみた日本——サン・パウロで日本を論じる——稲賀繁美

サン・パウロ大学の日本研究所で博士課程の授業を受け持つてから、はやくも四年が経過した。地下一階、地上三階の鉄筋コンクリートの研究所は、南米随一の日本語図書館を誇る。創設者は、日系一世として少年期に一家とともに入植した鈴木悌一。第二次世界大戦で連合国側についたブラジルは日本人移民の資産を凍結したが、日本敗戦後のその資産凍結解除に奔走した若き弁護士である。つづいては日本人移民悉皆調査という大事業を成し遂げている。この遍歴を見ただけでも、日本列島に留まれば発揮できなかったかもしれない才能が、新大陸で縦横に開花した有様が目に浮かぶ。人類学者としてアンデス研究に成果をあげた泉靖一とは、莫逆の友となったが、鈴木がサン・パウロ、泉が韓半島の京城で、いわば植民地入植者の子弟としての少年期を送っている共通点も、見逃せない。七〇歳を過ぎた悌一は、高齢競泳記録保持者となり、晩年に手を染めた油彩画でも評価を得、デッサン教室ではモデルの北アフリカ出身の女性と、フランス語でヴェルレーヌの詩を暗誦しあった、といった艶のある逸話にも事欠かない。

そうした日系移民紳士録の個別例を、移民教育史などの社会学

的研究の地図のうえにマッピングしてゆくだけでも、二五〇万人程度のエスニック集団の歴史的・地域的推移が、手に取るように掴めてくる。日本列島以外で世界最大の日本人社会を研究することそのものが、日本研究のひとつの課題となるだろう。日本社会論を日本列島に限定するのは不利だ。それが門外漢ながら筆者の持論である。外部社会へと浸透し共存を強いられるなかで、いかなる変容を辿ったかの経緯に、日本社会の特色が析出するはずだ。

サン・パウロ大学で授業の相手となってくれた院生たちのうち何人かは、建築学科の院生で、すでに近辺の建築事務所での仕事も手伝っていた。日本語会話は流暢なのだが、それならと思って邦字新聞を読む授業を試みたところで、意外な障害が発覚した。口語日常会話には不自由しないからだが、漢字やカナの読み書きにはまったく対応できないからだ。思えば、三〇年代半ばのブラジル移民の生態を描いた石川達三の小説『蒼氓』が、折からの公式移民百周年もあってブラジル語に訳されている。だがこれは、一時は移民蔑視と批判された小説が復権を果たしたというだけのことではない。いまや移民三世、四世たちはブラジル語訳がなく

ては、自分たちの先祖の事跡を綴つたこの古典を読み解くこともままならないのだ。

これらの日系院生たちには、ずいぶんいろいろなことを教えられた。地球の裏側で、ヒロシマの原爆に取材した『はだしのゲン』について議論をするとは思つてもいなかったし、ソフィア・コッポラの *Lost in Translation* がブラジル人のかれらにとつて、日本を知るひとつの通路となつているのも、新鮮な発見だった。

ロラン・バルトの『表徴の帝国』がインテリたちの日本理解の魔法の鍵となつており、言語的な親近性から、今なおフランス語が知識人社会のステイタス・シンボルとして何がしかの役割を担っている。折から文化人類学者のクロード・レヴィ・ストロースは「百歳を祝おうとしていたが、『悲しき熱帯』がなぜブラジルのアマゾン河流域を舞台とするのかも、こうした文化的な背景を踏まえないと理解できない。

筆者の周辺にいる細川周平は『サンバの国に演歌は流れる―音楽にみる日系ブラジル移民史』（中公新書、一九九五年）、『シネマ屋、ブラジルを行く―日系移民の郷愁とアイデンティティ』（新潮選書、一九九九年）さらには『遠きにありてつくるもの―日系ブラジル人の思い・ことば・芸能』（みすず書房、二〇〇八年）によって読売文学賞を受賞している。相前後してブラジルに滞在した今福龍太もレヴィ・ストロースとの共著といつてもよい『サンパウロへのサウダージ』（みすず書房、二〇〇八年）のほか、『*Longe do Brasil 1935-2000* ブラジルから遠く離れて 1935-2000』（サウ

ダージ・ブックス共編著／港の人、二〇〇九年）をも世に問うている。井上章一には『ハゲとビキニとサンバの国―ブラジル邪推紀行』（新潮新書、二〇一〇年）がある。いずれも狭義の日本研究という範疇には収まるまいが、地球の対蹠地に立った日本観察の書物といえるだろう。ブラジルでキョウトとは殺虫剤メーカーの名称として著名、ということひとつ、日本では知られていない。

フランス東部、コルマル郊外にはアルザス日本研究所がある。そこで精力的に活動しているジル・ムラカミ教授は、実はサン・パウロ大学日本研究所の博士課程修了生。ストラスブール大学でしばらく教鞭をとっておられた言語学者で、ロドリゲスの日本法典を専門とする鈴木タエ先生も同窓で、実は彼女は鈴木悌一のご令嬢であった。ブラジル・フランスそして日本を縦横に活躍できる人材は、日本ではほぼ育成できない。海外日本人社会には、将来の日本語社会を外に開く貴重な潜在力が宿っている。

ワシントンDCでは二〇〇六年に *Embracing the Globe* と題する展覧会がサックラー博物館で開催された。ポルトガルの交易上の世界制覇を回顧する催しだったが、そこにはアフリカから南アメリカ、さらにはインドのゴアを経由してマカオから中国や日本へと貿易路を拡張した大航海時代の航跡が縦横にたどられた。世界史を構築した一方の覇者がポルトガル人だった。そうした世界大の視野のなかに、日本の参与をあらためて位置づけてみるところから、日本研究の視野を拡大することも、将来の課題だろう。